第11回 年次大会の報告

シンポジウム

分科会発表報告書

2018年度総会報告

学部創設20周年！未来への対話

―卒業生と語るコミ福力―

【シンポジスト】　土屋 ゆかり　（2002年度コミュニティ福祉学科卒業）
砂井 智光　（2004年度コミュニティ福祉学科卒業）
八重樫 温代　（2010年度コミュニティ政策学科卒業）
長谷 直樹　（2011年度スポーツウエルネス学科卒業）

【司会】　湯澤 直美　（福祉学科教授）

湯澤　定刻になりましたので、コミュニティ福祉学会まなびあい、第11回年次大会のシンポジウムを始めさせていただきます。本日はたくさんの皆さまにお集まりいただきまして、誠に有難うございます。私は司会の福祉学科・湯澤です。どうぞよろしくお願いいたします。さて、本日のシンポジウムのテーマは、「学部創設20周年！未来への対話―卒業生と語るコミ福力―」です。コミュニティ福祉学部が創設されてから、20年が経過しました。この「コミュニティ福祉学会まなびあい」ができてからは10年です。そこで、本日は、この学部が社会に向けて、あるいは、中学生や高校生といった次世代に向けて、どのように発信していけるのかということを、「コミ福力」をキーワードにして皆さんと一緒に考えていきます。ぜひ皆さんも、会場からご発言、ご質問いただければと思います。

では、シンポジストのご紹介に入ります。まず、コミュニティ福祉学部１期生の土屋ゆかりさんです。次に、４期生の砂井智光さん。学部の完成年度の時に入学してきた学生さんですね。コミュニティ福祉学部は、1998年から2005年の期

間には、１学科体制をとっていました。更に、2006年から2007年には、「福祉学科」「コミュニティ政策学科」の２学科体制になりましたが、その時に入学したのが八重樫温代さんです。最後に、2008年には「スポーツウエルネス学科」が新設されて３学科体制になりましたが、その当時に入学したのが長谷直樹さんです。

　コミュニティ福祉学部は、１学科体制から３学科体制へと発展してきたわけですが、それぞれの時代の卒業生に集まって頂くことができました。さきほど、打ち合わせの際に年代の話をしていましたら、今から話す土屋ゆかりさんが、「きょう報告の準備をするのが大変」と言っていましたが、それはどうしてですか？

土屋　私の学生時代はデジカメなんてなくて、海外に行くときにはみんな、この「写ルンです」、知ってるかな。今、リバイバルで、懐かしのカメラとして人気が出てるらしいんですけど、これを使っていたのをプリントアウトして、スキャンも一生懸命して作ってまいりました。

湯澤　さきほどの事前の打ち合わせでは、この20年間にいかに社会が急激な変化を遂げたのか、ということが話題になりました。そこで、本日は、まず、皆さんがどのような学生時代を送ってきたのかを語っていただきます。そのうえで、卒業後にはどのような歩みを進めてきたのかを報告していただきます。それらを踏まえたうえで、最後に、未来の対話という点から、「コミ福力って何だろう」ということを、皆さんと共に考えていきたいと思っております。

　では、ここからシンポジストの紹介に移ります。それでは最初に土屋ゆかりさんです。お願いいたします。

土屋　皆さん、こんにちは。１期生の土屋と申します、よろしくお願いいたします。先ほどから、20年前とか、１期生とか、写ルンですとか、ちょっと年をごまかそうと思っていたのにばれてしまっていて心が痛いのですが。学生の皆さんの15年ぐらい後の姿として聞いていただけれ

ばなと思っています。私はそんなに大きい仕事をしているわけではないのですけれども、コミ福で学べてよかったなと日々感謝しながら働いています。今は、東京都社会福祉協議会というところで働いているのですが、日々勉強したり学んだりしながら仕事ができて、しかも、それが誰かの役に立てるような仕事ができているということと、どちらかといえば声の大きい人ではなくて、声の小さい人の役に立てているのかなと思っていて、それが幸せだなと思いながら働いております。

私の略歴を簡単にお話しさせていただきたいのですが、1998年にコミ福の１期生として入学しました。創設当初のコミ福は、先ほどの写真にもありましたが、建物も少なくて、当然、人数も少なかったので、アットホームで、先生方と学生の距離が近かったなと思います。先生の研究室に入り浸って、プライベートの相談をしているような学生がいたり、事務室でネコを飼っているとか、非常にアットホームな環境で学べたなと思っています。また、１期生ということで、教員も学生も、新しいものを私たちで作ろうというような熱気があったなと思います。私は、１年生のときに、立教大学主催のフィリピンキャンプ、今はなくなってしまったのですが、フィリピンに行くようなキャンプを大学が主催していまして、それに参加したことがきっかけで、「アジア寺子屋」というサークルを友人たちと始めました。その活動が私の学生時代の思い出の中心になっています。アジア寺子屋というのは、今もあるサークルなのでご存じの方もいるかもしれませんけれども、フィリピンの農村部でホームステイをさせてもらって、そのお礼に教会のペンキ塗りをしたり、植林をしたりするような活動や、マニラのストリートチルドレンのNGO等をやらせてもらって、少しボランティアのようなことをさせてもらうというような活動をしています。私は、その後、フィリピン好きが高じて、３年生のときに、フィリピンのマニラにある大学で、立教大学との交換留学というものを採っていたアテネオデマニラ大学という大学に留学をしました。帰国後、コミュニティ福祉学研究科に進みまして、三本松政之先生にご指導いただいたおかげで修了することができ、現在、東京都社会福祉協議会で働いて、今に至っております。

湯澤　ありがとうございました。続きまして、砂井智光さんです。よろしくお願いします。

砂井　砂井智光と申します。コミ福第４期生なので、私が入学した時、４年生までそろった。そんな時期ですね。簡単に自己紹介します。現在は志木市役所の健康福祉部福祉課、障がい者福祉グループというところに

勤務しています。入庁したのが平成27（2015）年10月１日で、最初は福祉課の福祉総務グループというところで重度心身障がい者手当などの支給を担当していました。次に、平成28（2016）年４月１日から、生活支援グループで生活保護の担当をして、今年の４月から障がい者福祉グループで、障がい関係を担当しています。主に、障がいのサービスを使いたいという方の受付や、サービスの支給決定、あとは、困難ケースに対するカンファレンスの開催などを担当しています。また12月上旬の障がい者週間の時に行う、障がい者理解促進事業の担当もしております。

平成30（2018）年12月８日の土曜日、志木市総合福祉センターにおきまして、障がい者理解促進事業を行いますので、ご興味のある方がいらっしゃいましたら、ご来館ください。今年はカーレットという、卓上で、カーリングを行う競技を予定しており、障がいを持った方や、児童など、誰でもできるようなスポーツになります。また、「NPO法人クラブしっきーず」様のご協力のもと、スポーツ用車いすの試乗体験や、スポーツ用の車いすに乗ってミニゲームを開催する予定です。本日はよろしくお願いします。

湯澤　続きまして、政策学科の１期生・八重樫温代さん、お願いいたします。

八重樫　はじめまして、八重樫温代と申します。コミュニティ政策学科の１期生として入学しました。１年生の基礎演習は坂田周一先生で、２年、３年時には原田晃樹先生で、最後、４年生、卒論を書き上げるときは藤井敦史先生に教わりました。その後就職しました。私は、リーマンショックのときにつらい就職活動を行った１人なのですけれども、大学２年生から卒業まで出版社で編集のアルバイトしていたこともありますし、そういう方面に行きたいなと思って、大日本印刷の企画制作会社、DNPメディアクリエイトに入社しました。３年ほど前に大日本印刷のほうに転籍をしまして、今は自治体向けの窓口業務支援システムの製品企画、営業に携わっています。北海道から宮崎まで、窓口業務に携わっている職員の方々にヒアリングしながら、日々実証実験や導入に向けて準備・支援をしています。後ほど、少しお話しさせていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

湯澤　それでは、４人目の報告者、長谷直樹さん、よろしくお願いします。

長谷　こんにちは、長谷直樹と申します。私は、2008年に立教大学コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科の１期生として入学しまして、その後、コミュ

ニティ福祉学研究科で修士課程まで進みました。現在は、「スポーツ未来創造カンパニー」とうたっている「スポーツマーケティングラボラトリー」という会社に勤めております。日本のスポーツ産業は現在、5.5兆円といわれていますが、政府は2025年までに15兆円に拡張すると掲げています。その一丁目一番地であると言われているのがスタジアム、アリーナの利活用でして、その集客、収益拡大をするための戦略部分に携わっています。本日は「コミュニティ福祉力」についてのお話ということで、大学院在学中に経験したJICAの青年海外協力隊のお話を中心にさせて頂きます。青年海外協力隊として当時、世界で一番幸せの国としていわれておりましたブータン王国で、２年間、保健体育の教員として活動しましたので、そこでの生活や経験から感じた福祉の考え方などについてお話をさせていただければと思います。よろしくお願いいたします。

湯澤　それでは、きょうのテーマは「コミ福力」ということですので、その点も少し意識しながら、それぞれの学生時代について、どう過ごし、何を学んできたかということをお話しいただきたいと思います。それでは土屋ゆかりさんからよろしくお願いします。

土屋　私が学生時代、アジア寺子屋の活動が中心でしたと申し上げましたけれども、先ほどその説明させていただきましたが、私たちのときにはですね、当時のキリスト教学会のサークルなものですから、チャプレンの友人が住んでいたマニラからジープニーという、ちょっとぼろぼろのトラックみたいなのに乗って、24時間ぐらいかかる最北部の地域に行ってホームステイをさせてもらっていました。そこの村というのが自給自足の村でして、電気も通っていないような村でしたので、テレビがなくて、もちろん電気もなくて、暗くなると火をたいてとか、懐中電灯で、みたいな感じの雰囲気の村でした。その分、すごく豊かな文化を持っている村でした。朝起きたら火をおこして、料理を作って、川で洗濯して、『桃太郎』みたいですよね。お風呂はなくて、川で泳いで風呂代わりみたいな生活をしています。貨幣があまり入っていないので、肉というのが非常に貴重でして、年に数回、特別なときに鶏をつぶして食べるというくらいで、あとは野菜とお米を中心にしているような村でした。そんな中で、日本から10人近くの学生が村に行くと、村の食料、どんどん食べてしまうというのがありました。私たちは肉食ですので、野菜だけでは耐えられなくなってきて、それを知っているかのように、村人は非常に貴重な鶏肉を、ほぼ毎日つぶして私たちにごちそうしてくれるんですね。行くと、みんなの名前を覚えて大歓迎して、とても愛して、かわいがって

くれます。私たちが英語もろくに話せないし、ボランティアといっても村の人と比べてできることが全然ない。ほぼ食べて寝るだけというような感じで、大して役に立っているわけでもない。

そんな中で、私たちにできることって何なんだろうということを考えさせられる経験でした。私たちは、そのことを「愛の重荷」と言っていたのですけれども、村人たちの愛に対して、私たちが返せない愛の重荷を背負って、私たちが何ができるのかなとか、どう私たちの大量消費の生活、ライフスタイルを変えられるのかなとか、そんなことを考えるようになりました。

その後、３年生のときにフィリピンの大学に交換留学で行きましたが、そこの大学というのは、都心のマニラにありまして、いわゆる日本の慶應義塾大学をもっとセレブにしたような大学で、中華系の方が多いですし、標準語は英語っていう感じで、村とは全然違う、アメリカナイズされた文化の世界をフィリピンで経験しました。交換留学をしているときは、学校に通いながらストリートチルドレンの支援をしているNGOにいったり、日本に来て、その後フィリピンに帰ってきて、なかなか生計が立てられないフィリピン人に対して、助成活動を支援しているNGOにも通いました。

印象としては、子どもたちがとにかく明るくて、地域の中で支え、支えられるということを、フィリピンでは当たり前にしているなと感じました。その地域の中での支え、支えられるという関係性が非常に印象的でした。そんな経験をして日本に帰ってみると、なんか息苦しいなと思うようになりました。フィリピンにはいろんな人がいて、それはそれでいいというような世界なんですけれども、日本では、本当は自由なはずなのに、見えない空気を読んで同調する、違うものを排除する、そんな空気があったなと感じるようになりました。

私はその後、学部３年生のときに児童自立支援施設という施設に実習に行きました。社会福祉士を取るための実習です。児童自立支援施設についてご存じない方がいるかもしれないので、ちょっと説明させていただきますと、軽犯罪等の不良行為を行ったり、あるいは、環境等の理由で生活指導が必要な子どもたちが入所している施設です。子どもたちの日常生活をそこで支えるとともに、学校のようなものも敷地内にありまして、そこの学校に子どもたちが通うというような施設でした。つまり、子どもたちはずっと敷地の中にいて生活しています。私の実習させていただいた児童自立支援施設は小舎制という形でしたので、ざっくり言うと、子どもたちは指導員である夫婦２人の運営している施設で寝起きして、施設内にある学校の

ようなものに通って、また施設に帰ってくるというような生活でした。私は、朝昼夜と、子どもと指導員の方と一緒に食事をさせていただいていたのですけれども、私にとってとても衝撃だったのが、食事中にしんとしているということです。私の家庭だったら他愛のない会話があるのですけれども、そういった会話が全然なくて、私としては大変衝撃でした。私は実習中ほとんど敷地の外に出ないで、泊まり込んで実習していましたので、とにかく自由になりたい、外に出たいというような気持ちになりました。そのときに気が付いたのが、私は２週間したら家に帰れるけれども、子どもたちはそこが生活の場であって、帰りたくても帰れないし、また、親が行方不明だったり、刑務所にいたり、引き取りを拒否していたり、虐待を受けていたりといった子どもが多かったので、子どもたちは帰れる場所がないのだなと思いました。そう思いますと、５歳とか10歳しか変わらない、私とその子どもたちの間の溝の大きさにがくぜんとしました。中学校卒業した後の年齢の子のための、アフターフォローの施設も併設されていたのですけれども、将来の選択肢が非常に狭い、いつも頑張らなくちゃいけない、そういう子どもたちの状況に不公平感を感じました。それで、大学卒業後に三本松先生にご指導いただきまして、立教大学コミュニティ福祉学研究科で、「ソーシャルエクスクルージョン（Social exclusion)」という社会的な排除と包摂のためのコミュニティの可能性をテーマとして修士論文を書かせていただきました。

それで、コミュニティの可能性と申し上げたのですけれども、ちょっと、皆さんと一緒にコミュニティ福祉学部のコミュニティって何か考えたいなと思います。コミュニティって考えたことありますかというスライドを作りました。私は、学生時代にフィリピンとの出会いで、人々が貧しい中でも明るく生きているのはコミュニティの存在が大きいなと思うようになりました。支えている、支え合っている、そういう感覚が、人が人間らしく生きていく上での基盤になるのではないかなと考えています。以上が学生時代で考えたことになります。

湯澤　ありがとうございました。自らアクセスしたアジア寺子屋というフィールド、あるいは社会福祉実習というフィールドをとりあげながら、学びとってきた

ことをお話しいただきました。ありがとうございます。それでは、次に砂井さんですね。よろしくお願いいたします。

砂井　私の場合は、何か一つのことを成し遂げたということはないため、私自身が、大学生活を送っている中で、どのように思ったか、そんなことを本日はお話しできれば良いなというふうに考えております。そもそも、最初からコミ福を希望していたわけではなく、当初は、史学科を希望していました。というのも日本史が非常に大好きで、特に日露戦争が非常に大好きなんですよ。日露戦争の話になると、多分３時間ぐらい話せるのですけど。

進路を決める直前まで、史学科に行きたかったのです。しかし丁度、学部の進路を決めるときに、父方の祖父が脳梗塞で倒れてしまって、板橋の東京都健康長寿医療センターに入院したのです。そこに何回もお見舞いに行くのですけれども、その時は、もちろん大学に入る前ですから、その祖父に対して何もできない、知識も何もない。どういうことが祖父に対して出来るのだろう、これからどうなるんだろうと考えたときに、全く知識がない私がいて、それが非常にもどかしさや悔しさがありました。そこでこれからは福祉の知識がなければだめだということで、コミュニティ福祉学部で福祉の勉強をしようと思い、コミュニティ福祉学部に入りました。

ただ、福祉の知識が全くない状態で１年生になったので、最初の１～２年間、勉強が非常に楽しかったです。聞くこと見ること、全てが新しいことだったので、こういう世界があるんだって、正直すごい勉強になりました。

基本的に私は、好奇心も非常に旺盛で、体験主義者です。やりたいなとか、これなんだろうと思ったら取りあえずやってみる、そんな性格なんですね。なので、大学時代は色々体験しました。飲食店でのバイト、児童養護施設で家庭教師、『Voluntar』という雑誌、今ウェブ上での雑誌になっているのですが、そこで福祉機器の連載記事を書かせてもらったり、新潟の中越沖地震のときにボランティアに行ったり。卒論を書かずに、中国語があんまりしゃべれない状態で、史学を勉強したいからと、個人旅行で中国の東北地方に行ったりとか、とにかく、私がやりたいことを沢山やってました。

そんな大学時代を過ごしてたのですけど、そんな時に感じたことが二つ。まず、私の専門分野以外のことにも興味持つということが大切なのかなというように、個人的には感じます。どういうことかというと、実体験に基づく理解というのが、大きいなというふうに思うんですね。ここで話した、児童養護で家庭教師とか新

潟中越沖地震のボランティアなど、話してしまえば、それで終わっちゃうんですけど、実際いまだに、ボランティアに行ったときに、マンホールのふたがスーパーマリオのゲームのように、ドラム缶みたいに突き出ていたりとか、余震が起きるたびにものすごい真っ青な顔して不安がる住民の方を見て、地震ってすごく怖いんだなっていうような認識を、実体験を通して感じた。そういう実体験は、文章では伝わらず、体験したからこそ身体で分かる。それはすごく大切なんだなと思います。

あとこれはドイツの哲学者、ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer, 1788－1860）という人が『誰もが私の視野の限界を世界の視野の限界だと思っている』っていうふうに言ってるんですね。私の視野の限界が世界の限界だと思っちゃう、私が感じている世界が、世界も同じように感じていると勘違いしてしまう。だからこそ、私の視野と違う人と交流することで、新しい視野、新しい世界が広がるんじゃないかなと考えました。それは、別に必ずしも仕事に役立つわけではないのですけど、人生の彩りが増えるんじゃないかなと感じています。でもそれは、仕事をする上でもとても大切だと思うし、仕事をやる上で人生楽しくないと、多分いいものは生み出せないんじゃないかなと思っています。

私が、専門分野以外で興味を持ったことは、安藤忠雄さんという建築家、ご存じですか。元プロボクサーの建築家なんですよね。１級建築士を独学で取った方です。建築物に非常に特色があって、壁がコンクリートむき出しな建築をする非常に有名な方なのです。皆さんが知ってる建築だと、「表参道ヒルズ」の建築を設計された人なのですよね。街並みの調和をするために、ケヤキの木と建物が同じ高さになっています。また建物の中の西館と本館をつなぐ「スパイラルスロープ」は、ケヤキ坂の傾斜と同じになっているとか、非常に面白い建築をする方です。あと、「光の教会」を建築した人です。なぜ光の教会かというと、コンクリートに十字架の形で隙間が空いており、そこの光が差し込んで十字架が光っているように見えることから、光の教会と言われているのです。そういうことに興味を持って勉強したこともあったんですね。

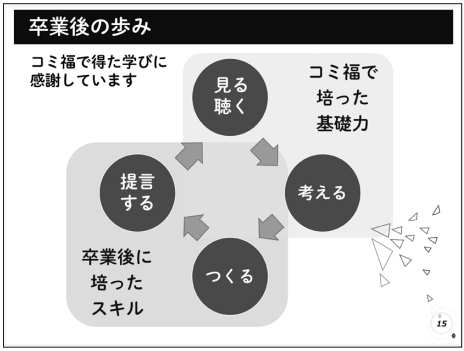
このように、人生が豊かになってコミュニティが広がってく、そこで私が何かをやりたいと思ったときに、私の専門業界とは違う人の意見を聞く、そういったことで新しいことができてくるのじゃないかなと思います。

あと、大学時代、児童養護の家庭教師とか、『Voluntar』の雑誌も、ボランティアも、全て人とのご縁があったんですね。例えば児童養護の家庭教師の時は、浅井春夫先生からの紹介で「ちょっとやってみない？」と言われてやったのがきっかけでした。『Voluntar』って雑誌は、私は立教中学校出身なのですけど、そこの卒業生の方が出版社を経営されていて、私が立教出身者っていうこと知って、じゃあ連載をやってみないかとなりましたし、新潟中越沖地震のボランティアの

ときは、ふじみ野市の市議会議員の方が一緒に行こうよと誘ってくださり、ボランティアに行くことができた。そういった、人とのご縁で体験させてもらえた、また助けられてきたというのがあるので、人とのご縁を大切にしていくのが、非常に重要、大切なんじゃないかなと感じました。私からは以上になります。

湯澤　さまざまな体験の蓄積からのお話を、ありがとうございました。新潟中越地震のことを今お聞きして、学生時代に何が起こっていたのか、その時代背景の中で学生生活が様々な意味で規定されたり発展したりする、ということを感じました。では八重樫さん、お願いいたします。

八重樫　私は福島県出身なのですけれども、高校時代、放送部に入っていて、放送部が強い高校ご出身の方はご存じかもしれないですが、結構しっかりしたスタジオがあったり、私たちでドキュメンタリーを作ったりとか、そういうようなことをやっていたので、マスコミ志望だったんですね。マスコミに行くのだったら東京の大学に進学したい。それでどこ行こうかなって決めているときに、社会学を学びたいという思いが漠然とあったので、いくつか検討していた中で、１期生というところに惹かれてコミュニティ福祉学部に入学しました。私の父親も都内の大学の１期生でして、「１期生はいろいろ盛り上げていくのが楽しいよ」という話も聞いていたので、受験しました。思考するサイクル（見る・聴く→考える→つくる→提言する）がこの４年間で身に付いたのかなって思っています。「聴く」っていう漢字を難しいものにしているのは、ただ「聞く」だと右から左に流すっていうこともあると思うのですけども、寄り添って聴く、この人は何を考えている人なんだろうと考えながら聴いていくっていうことは、かなり鍛えられたと思っています。入学前からマスコミ志望だったのですけども、講義名は覚えていないのですが、ハンセン病患者の方のお話を聴く機会がありまして、「今日私から聴いたことをきちんと伝えていってほしい」というようなこ



当日の投映資料より

とを言われて、やっぱり私は伝える仕事をしていきたいな思ったのが、いまでもとても印象に残っています。

在学中、実際にどういうことをやってきたかといいますと、２年、３年と原田ゼミに所属していたのですが、地域活性化の政策提言をするっていうようなゼミだったと認識しています。伊豆の伊東市だったり、三重県伊賀市や、杉並区、地方・都市部を問わずいろんな地に、実際に行きヒアリングをして、その地の課題を認識して一緒に考えるといったことをしていました。2007年には「全国大学政策フォーラムin登別」というコンテストに出場しました。これは今も原田ゼミの皆さんは参加されていると思いますが、当時、私たちは２班、A班・B班で出まして、私はゼミ長としてA班をまとめていました。ここで最優秀賞をいただきました。「観光客を一市民に～登別へ帰ろう～プロジェクト」という、なんだかかっこいい名前を付けているのですけども、イメージとしては、住民と観光客と行政がパートナーシップを組んで、観光客が１回来ただけで終わってしまうんじゃなくて、観光客に「のぼりベアン」という名前を付けて、「のぼりベアンカード」という証を持って何回も来てもらって、UIJターンとか移住促進とか、そういうところまでつなげていければ、みたいな提案をしました。今は自治体に向けて学生が政策提言をするというのはどこでもやっているような感じになっていますが、当時としては結構はしりだったかなと思っています。

そして、３年次の社会調査実習で、私は質的調査のクラスに所属しました。＜NPOとCSRの協働＞を研究テーマにして、企業のCSR活動とNPOとの協働を支援する中間支援組織などにヒアリングを重ねていきました。かなり、私としてはヒアリング量が多く得るものが大きかったので、これを卒論にしたいなと思って、藤井先生にご相談をして、藤井ゼミに移り＜NPOとCSR活動における中間支援組織の在り方＞を卒論のテーマにすることにしました。すごく熱いゼミで、夕方５時ぐらいに始まって、気が付いたら８時とか、そんな感じの議論が絶えない、とても有意義な時間だったなと思っています。先ほど、藤井ゼミの３年生の方々の発表を少し拝聴したんですが、変わらないなというか、真面目に頑張っているんだなと嬉しい気持ちになりました。あとは、新座市内の３大学、跡見学園女子大学・十文字学園女子・立教大学の合同で、新座市長への政策提言をしたり、ワーカーズ・コレクティブ全国会議でビジネスプランを発表する機会をいただきました。その全国会議が卒論提出の２日前だったのですよ。藤井先生から、「ちょっと八重樫さんやってみ

卒業研究発表会にて

たら」と言われて、粛々と友人と準備をして臨んだのですが、いざ当日、藤井先生は会場にいらっしゃらなかったという、すごく印象的なことがありました(笑)。

そして、今はインターンシップもすごく充実していると思いますが、私はまだそんなに充実していない1期生でしたので、コミ福のインターンではなくて「立教型インターンシップ」、全学部生が受けられるインターンシップで、埼玉県ふじみ野市役所にインターンに行きました。ボランティアセンターが主催の、山形県高畠町に行く農業体験にも参加しました。教職課程を取っていたので、母校の高校に教育実習にも行きました。ほかには、放送研究会に所属していまして、地域と立教をつなぐような番組を作りたいなと思って、当時新座市・志木市・朝霞市・和光市で放送していたコミュニティFMに企画書を持っていって、『立教に行こう！』というラジオ番組を毎週30分間放送する枠をいただきました。先ほど調べたらまだ放送しているようですし、立ち上げてよかったなと思っています。番組を立ち上げた背景には、放送研究会はアナウンサーや音響・技術に携わりたい人が多いので、一人ひとりが何か力を付けるような機会があればいいなという思いもありました。振り返ると、先ほど申し上げた思考するサイクルの中の、特に「見る」、「聴く」、「考える」というところが、4年間で鍛えられました。

山形県高畠町　農業体験にて

湯澤　ありがとうございます。やはり学科それぞれに特色がある、という感じがよく伝わってきましたね。ちょっと気になったのですが、『立教に行こう！』って何ですか。

八重樫　『立教に行こう！』はラジオ番組名です。新座キャンパスですと、学園祭でバザーをやっていて、地域の方が来てくださったりするじゃないですか。例えば、そうした地域に開かれたイベントを広報する機会って、当時はあんまり無いなあと感じていました。かつ放送研究会の学生が学外向けに情報発信する機会というのが、創設50年間の中に無かったので、そういう場を作れればいいなということで、地域のコミュニティFMに提案に行きました。

湯澤　それこそ、地域の中にあるキャンパス、という視点ですよね。大学が地域に対して何ができるか、という点にも繋がる視点だと思いました。50年という言

葉が出てきて、素晴らしいですね。ありがとうございました。それでは、次は長谷さんですね。お願いします。

長谷　先ほどもお伝えしたとおり、大学院時代に青年海外協力隊としてブータン王国へ行きまして、そこでの２年間の経験がすごく大きかったので、そのあたりのお話をさせていただきたいです。そもそも、学生時代を振り返ると、スポーツがとにかく好きではあったのですが、体育会運動部にも所属していなかったので、時間や体力はあるけどどう使えばいいか分からず、大学４年間はいわゆる「ギャル男」でした。オールラウンドサークルを作って、パーティーを主催したり、クラブイベントをやったり、とにかく遊びつくしました。そんな大学生活を経て、大学院に進学し、さまざまなご縁でブータンへ行く事になり、ブータンでの生活からいろいろ考えさせられたというのが非常に大きな経験でした。

ではなぜブータンだったのかと言いますと、2011年の３月11日に発生した東日本大震災がブータンを知るきっかけでした。そのとき、大学３年生の春休み期間で、まわりはみんな就活をしていたのですが、私は進学予定でしたので、友人とスノーボードに行っていました。ちょうど山形県の蔵王から福島のゲレンデに移動する最中、東北道を運転していて、そこで震災に遭いました。その瞬間はすごい風が強いのかなと、それだけの印象しか持ってなかったのですが、高速道路を降りたら日本が大変なことになっていて、ことの重大さに気づきました。

日本が震災にあった同じ年に、ブータン王国の第５代国王であるワンチュク国王がご結婚され、結婚後最初の外遊、いわゆるハネムーンで日本に来られました。国王陛下は福島の学校を訪問されたり、国会で演説をされたのですが「ブータン国民を代表して皆さまを励ましに来ました、この世界に日本という国があることに感謝します」という、凄く温かいお話をされている様子をテレビで見てブータンという国に興味を持ちました。そこから、日本でもちょっとしたブータンブームみたいなものが起きまして、「世界一幸せな国」としてブータンが有名になりました。そのとき私もブータンへ一度訪れたいと思い、結局、2014年に青年海外協力隊としてブータン王国に行きました。

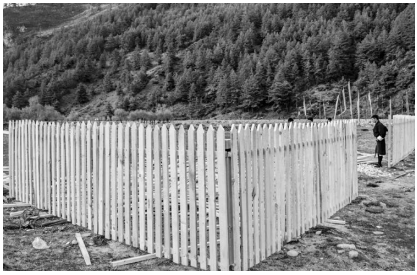
ブータンについて簡単にご紹介させていただきますと、特徴として、物質的な豊かさではなくて精神的な豊かさを国の発展指標としております。それからまさに秘境と言う言葉がぴったりな国でして、常任理事国との国交が一切なかったり、旅行で行くと１日の滞在が250から300ドルかかったり、それから、旅行するためにはブータンの国内はブータンの航空会社が運営する飛行機でしか入国できなくて、入国してからも専属のガイドとドライバーがいないと国内を移動できないという国です。私が２年間生活した「ハ」という村は緯度が沖縄と一緒くらいで、すごく日差しは強いのですが標高2,600メートルということで本当に寒かったで

す。首都はティンプーという県なんですけど、ティンプーから私の住んでいた村へは、富士山より高い3,988メートルのチェレラという峠を越えなければいけませんでした。ブータンでは4,000メートルの山を峠っていうんですけど、峠の途中からはヒマラヤ山脈が一望できます。チョモラリという7,314メートルの、富士山の２倍みたいな山もあります。それから、国の東西を結ぶ道は一本しかないので、ちょっと雨が続いたりするとすぐ土砂崩れで道が塞がり、「今日は移動できないね」となります。濃霧で全く前が見えないということもあったりします。ブータンの生活は標高が高いので、本当に極寒でした。また停電とか断水が日常茶飯事であったり、お風呂に入れないというのも途上国ならではの経験でした。

ここからはブータンでの活動について少しお話しさせて頂きます。私は大学時代に教員免許を取得しており、大学院を経て、専修免許が取得見込みとなったというところで、スポーツおよび保健体育の普及、振興というミッションのもとブータン王国に行きました。ただ、ブータンのスポーツ事情は、当時、FIFAランキングが世界最下位の208位だったりとか、そもそも義務教育がなかったりとか、山岳国のため平地がほとんどないとかで、スポーツをするにはとても不向きな国でした。日本がサッカーのワールドカップ予選を戦う時は、アジア２次予選からですが、ブータンは世界で一番サッカーが弱い国なので、３次予選から出場しなければいけません。国際大会の試合中に野良犬がグラウンドに走り回っている。そんなスポーツ環境でした。ただ、ブータンの学校に私が着任したときに、子どもたちが即席でサッカーゴールを木で作っているのを見て、これがスポーツの根源なのかなというか、場所とかモノがなくても子どもたちを惹きつけるという点が、すごく素敵なことだなと感じました。

この写真は、私が子どものときに使っていたユニホームを日本から取り寄せて

ブータンの子どもたち



ブータン初の器械運動公園の作成

ブータンの子どもたちにプレゼントした時のものです。ユニフォームを手にした子どもたちが喜んで裸足でサッカーをしていた様子は今でも鮮明に覚えています。また、私はもともと陸上部だったので、ブータン初の駅伝大会を実施したりしました。その他には、ブータンで初めての、器械運動公園もつくりました。こ

れは一本一本、柵を手作りで作っている様子の写真です。この写真、凄くお気に入りなんですけど、コミ福の案内のパンフレットにもこの写真を掲載いただきました。器械運動公園の開園式には村人もたくさん集まってくれて、ちょっとした話題にもなりました。県知事さんからは感謝状を頂いたりもしました。

ブータン初の器械運動公園の作成

ブータン王国の配属先に・・・

この写真は私の配属先の学校なんですけど、実は、ブータンの国王、王妃と撮影した写真なんです。私の右側はブータンの総理大臣です。配属先に、私がブータンに興味をもったきっかけでもある国王陛下が訪れて、王妃や、総理大臣にもお会いすることができて、私は凄く運の良い日本人だと思っています。本当に貴重な２年間をブータンで経験させていただいたというのが、私の学生時代の大きな思い出です。

湯澤　今度、いつかブータンについての講演会をしてください。ありがとうございました。さて、シンポジストの皆さんの報告から、学生時代に「大学生だからこそできること」が本当に大きいな意味を持つ、とあらためて感じたところです。そこで、皆さんも無事卒業して、その後、どのような歩みを進めてきたのかということを次にお聞きをしてみたいと思います。その話の中で、コミ福で培ったも

のがどう生かされたのか、ということも併せて触れていただければと思います。それでは、土屋ゆかりさんからお願いいたします。

土屋　私は、就職を考えたときに、実習で出会った子どもたちのような、大変な環境にいる子たちの生き方の幅であるとか、チャンスを広げられるような仕事がしたいということと、そのときに地域とかコミュニティというのを大切にしたいなと思っていたのと、もう一つ、現場と研究をつなげられるような仕事がしたいなと思いまして、縁があって東京都社会福祉協議会に入職することができました。東京都社会福祉協議会はどういう団体なのか、ご存じの方もいるかと思うのですけれども、説明させていただきます。東京都社会福祉協議会は、主に都内の社会福祉施設、事業所等が会員になって活動している団体でして、その他にもNPO団体であるとか、行政、市民活動、企業等、さまざまな関係者の幅広いネットワーク作りを通じて、誰もが暮らしやすい地域社会の実現を目指して活動している団体です。具体的に言いますと、広報、啓発、調査研究、研修、あとボランティアセンターを持っていて、ボランティア、市民活動の推進、あとは人材確保。皆さん、福祉系の仕事に就職したいなと思ったときに、福祉人材センターというのを利用していただくことがあるかもしれませんけれども、その福祉人材センターを持ってたりもします。また、政策提言等もしており、幅広い活動を行っています。

私は、入社して１年目、地域福祉部の権利擁護担当に配属になりました。具体的には、地域福祉権利擁護事業等を担当するのですけれども、地域福祉権利擁護事業は何かといいますと、ざっくり言うと、認知症の方とか知的障がいのある方の金銭管理、郵便物の整理等を通じてであるとか、あるいは福祉サービスのアレンジメント等を通じて、認知症の方や知的障がいのある方等の地域生活を支えるという事業です。東京都社会福祉協議会として何をするのかと言えば、実際に利用者のお宅に行くのが区市町村の社会福祉協議会で、東京都社会福祉協議会は区市町村の社会福祉協議会の人たちをバックアップする仕事で、具体的には、研修であったり、区市町村の社協の人が困ったときに相談に乗ったりというような仕事をしています。

そこから学んだことは、人々を支えるのが地域なら、排除するのも地域なんだなということです。私のとても尊敬している、ある市の社会福祉協議会の方がいるのですけれども、その方が、地域で暮らしていけなくなるときってどういうときだと思う？と問い掛けました。それは判断能力が低下したときや体力が低下したときではなくて、近所の人からの苦情で、もうこの地域にいられなくなったとき、そういったときに在宅での暮らしを諦めざるを得なくなるんだよと言っていました。まさにその意味では、地域の寛容性というファクターが非常に大きいなと感じました。

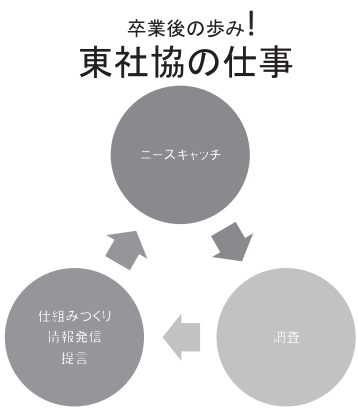
私は３年目の壁として、皆さんもこれから経験するかもしれませんが、仕事辞めたいと思うときがありまして、具体的には、どうしても東京都社協（東社協）の仕事というのは制度政策の中での仕事ですので、本当は利用者の方にこうしたほうがいいんじゃないかなと思っても、ストップを掛けざるを得なかったり、直接現場で働ける場というのがないもどかしさ等を感じて、辞めたいなって思うことがありました。そのときに、「東社協の仕事は想像力を使う仕事で難しいけれど、その分可能性も大きいよ」とコミ福の森本佳樹先生が励ましてくれました。あなたならできるよというふうに言ってくださって、今もその言葉を胸に働いています。

その後、平成22（2010）年に総務部の企画担当に異動になりました。そこでは、広報誌の発行とか、東社協の３カ年計画の策定、災害時の支援の政策提言等、非常に忙しかったのですけれども、その中で最も印象に残っているのが、低所得世帯の子どもの情報と支援のプロジェクトという東社協の３カ年計画の中で行った事業です。これは中学校の先生であったり、学習支援のボランティア団体の方や奨学金団体の方、福祉関係者の方々等に委員になっていただいて、さまざまな立場の方と一緒に仕事をさせていただき、東社協の仕事として非常に大きな醍醐味を感じました。委員長には、今ここにおられます湯澤直美先生にやっていただきまして、いろいろご指導をいただきました。

このプロジェクトでは、東社協の事務局という立場で、中学校、教育委員会、あしなが育英会の奨学金を利用している保護者と子どもにアンケート調査を行って調査報告書をまとめました。その結果というのが、５人に１人が高校進学を諦めようと思った経験がある、４人に１人の子どもが学費を心配している等、子どもという立場なのに既に学費を心配している子どもたちがいるということ、そして、保護者が一つの奨学金だけでは進学させられない、そういった調査結果が来ました。その調査結果に基づきまして、都内の中学校に配るリーフレットのようなものを作成しました。その名前が、『拝啓中３のあなたへ　はじめよう！高校生になるために』というものです。具体的には、同じような体験をした先輩からのメッセージであるとか、これからの選択肢、高校に行きたいという気持ちを応援する制度、奨学金、教育費の助成やご紹介等をまとめました。本当にただの事務局でしたが、委員のお力をはじめとして、福祉と教育の力のシナジー効果（相乗効果）で非常に好評いただきまして、たくさんの中学校や保護者からもっと欲しいと問い合わせを受けたり、NHKや朝日新聞の全国版でも取り上げていただきました。

東社協の仕事というのは、どの部署であっても、日々の仕事からニーズや現在の課題をキャッチして、それを調査等で立証、提言していったり、解決のためのツールを作ったりすることが仕事だと思っています。そのサイクルを作っていかなければいけないなと思うきっかけが、やはりコミ福での勉強の結果だったかな

と思っています。一方で、このプロジェクトはご好評いただいたので、もうちょっと深めていきたいなと思いまして、次にやろうかな、やりたいなと思ったことがあります。東社協では資金の貸し付けを行っているんですね。それで、低所得世帯の資金の貸し付けをしているその方々を見ている中で、朝起きられない、遅刻する、ご飯を食べない、ゲームばっかりしてやる気ない、急にどたキャンする、仕事を辞めていなくなる、そういった一般常識みたいな、そういうものが不十分な人がたくさんいると。そういう子どもたちと一緒に料理を作ったり、生活習慣を整えたりしながら将来の道を考えていくような、そういった取り組みができないかなというふうに考えました。そのことを湯澤先生に相談したところ、東社協で取り組むべきことはそういうことではない、子どもたちを教育したり訓練するのではなくて、ちょっと羽を休めたり、私を受け止めてもらえる場を作っていくこと、それが東社協でやるべきことなんじゃないかとご意見をいただきました。私はそれを聞いて、勝手な意見ですが、これが湯澤先生の信念とも言えるようなもので、これがコミュニティというものでコミ福の理念なのだなと思いました。私としては、それを聞いて東社協としてどのようにできるか考えていましたが、途中で残念ながら異動になってしまいました。



当日のパワーポイント資料

実は、この間３人の子どもを産んで、産休育休も３回いただいて、この４月に復職したばかりなのですけれども、なかなか子育てと仕事をすることの両立っていうのは、非常にどちらにも中途半端になってしまったり、悩むことも多いなと思います。今まで私はコミュニティとか地域とか言ってきましたけれども、学生時代の地域っていうのがぼんやりしていたんですね。それが子どもを産んで育てることで、私や子どもが生きていく場所としての地域なのだなと思うようになりました。

実際、私の娘が今、小４なのですけれども、その同級生のお母さんっていうのが、私の娘を心配したり、話を聞いたり、おやつを出したり、宿題を見たり、そういったすごく寛容なお母さんがいまして、私がなんでそんなことまでできるのと聞くと、だってここで生きていくしかないんだからという答えが返ってきました。私はそれを聞いて、そういうここで生きていくしかないというような覚悟が地域を良くしていくのかなと思うようになりました。実際、私が育休中に家にい

ると、９時ぐらいまで親が帰ってこないという子どもが普通にいて、寂しくて友達の家をうろうろしたりとか、コンビニの前でうろうろしたり、ご飯食べたそうにうちにやってきてご飯を食べて帰っていくとか、そういうような子どもがたくさんいまして、子どもとしては親がいなくて１人で留守番なんて寂しいし嫌なので当然だと思うんですけれども、そういったのを見て、何とかならないかなと今は考えています。以上です。

湯澤　ありがとうございました。いろいろプロジェクトがありましたね。あるプロジェクトが話題になり、土屋さんはNHKニュースにも出演したのですよね。先ほどの話でも、「生存の場としての地域」というとても重要な提起をしていただきました。それでは、次に砂井さん、お願いいたします。

砂井　私は大学生活の４年間で福祉を学び、福祉業界に就職しようというふうに考えました。平成17（2005）年から今に至るまで、実にたくさん転職をしてるんですが、これは私なりにちょっとルールがあって。１つ目は、大学４年生のときに、就職するにあたってどういう就職をしようかなって考えた時、コミュニティ福祉の教授・坂田先生から、福祉はどこも厳しいから、覚悟して就職してくださいとストレートに言われていたので、就職するのだったら、いっそのこと最も厳しいところから始めようと考えました。

２つ目は、30歳まではいろんな法人とか現場、サービス内容の違う現場を体験しようと考えました。30歳くらいから、管理職を経験してみたいというような思いがありましたので、それまでは沢山の経験をしたかった。

最後の３つ目は、転職するときは、必ず別の法人か、サービスの異なる企業に転職するというルールを決めました。これらのルールを必ず守ろうって決めたのです。

そこで、大学生のときから、NPO法人二人三脚というところでヘルパーとして働いていたので、一番きついと言われているNPO法人に勤めようと考えました。

NPO法人なので、若い子が全然入ってこない。最終的には月に１回しか休みがない月とか、夜勤明けからの日勤で、さらに続けて夜勤とか、ちょっと信じられないような勤務が続いたんですね。そこで、就職してから１年ちょっと働いたときに、次は株式会社に行ってみたいなと思って転職活動して、株式会社ウイズネットという会社に入りました。最初はデイサービスの生活相談員というのをやりました。生活相談員というのは、簡単に言うとデイサービスを利用されている方の相談にのったりする仕事です。しかしそこは現場ですので、相談だけではなく、現場のレクリエーションとか送迎も担当したり、センター長の補佐もしていたので、デイサービスの運営について学びました。その後、たまたまスーパーバ

イザーをされている上司の方から、１年後つぶす予定のデイがあるのだけど、ちょうど管理者がいなくなったから、挑戦してみないかという声が掛かったんですね。それで、どうせつぶされる予定のデイサービスがあるのだったら管理職をやってみようと思って飛びつきました。スーパーバイザーの方も、もしうまくいったら本社に呼んでやると発破をかけてくださったので、その甘い言葉に乗りました。それで、ふた開けてみたら、毎月そこのデイサービスは約450万の赤字を出す、本当につぶれる寸前のデイサービスだったんです。これは本当にやばいなと思い、ひたすらがむしゃらに営業を掛けて頑張ったり、現場の改善をしたりして、半年後には約300万円の黒字を出すことに成功しました。最初、１日の定員が40人なのに３人ぐらいしか来ていなかったので、重度の人でもデイサービスで見ますと言って営業をかけたところ、車いすの認知症で、視覚障がい者の方を紹介されました。どこのデイサービスも断るような方をお受けして、職員皆で一生懸命介護していたら300万円の黒字になったんですね。そして、約束を果たしてもらい、本社のほうに行くことができました。

本社に行って「何したい？」と言われたので、「営業をやらせてくれ」って最初言ったんです。しかし、配属された先がなぜかお客さま相談室で、苦情受付とか、債権回収というのをやらされました。苦情受付をやるのに、債権回収やるのはちょっとおかしいのですけれども、人手がいないということで両方やらされていたんですね。でも、ここの経験というのが、実は今もすごく活きています。本当にいろんな人間がいるのだなっていうことが、身にしみて分かったんです。

例えばどういうことかというと、債権者ですから、お金払わない人だったりして、「お金払ってください」って電話をするんですよ。人によってはすごい役職が高い、社長とか部長とかに電話を掛けるんですね。そこで、「ウイズネットの砂井です、いつ頃お支払いいただけますか」なんてお電話したときに、「おまえみたいな下っ端から電話を掛けてくるな」と言って切られちゃって。お金を払ってない人が、なんでそんな高圧的なんだろうと思ったり、理不尽だったんです。本当に、私の想像を超える人がたくさんいたっていうのは、良い経験になりました。

その後、１年後に念願の営業のほうに配属をしてもらい、そこでグループホームの入居や、福祉用具の営業販売をしました。営業は一番立場が弱いので、何を言ってもすごく下に見られるんですよね。その人たちに売らなきゃいけないということで、先輩のほうから交渉の仕方とか折衝の仕方を勉強しました。それは今でもお客様対応という点では非常に役に立っています。今の市役所でのケースワークのところでも、すごく活きていると感じています。

そんな１年間をずっと過ごしてきて、平成24（2012）年にそろそろ30歳、もう１度管理職やってみたいなと、今度は東証２部上場の株式会社ケアサービスに

転職活動して、デイサービスの所長として就職することができました。ここで管理職としてキャリアプラン積んでいこうって矢先に、ちょっとしたアクシデントがありました。すべり症とぎっくり腰をやっちゃったんですね。すぐにドクターストップでした。普通の生活を送りたいのであれば、もう介護現場を辞めなさいって言われました。それが平成25（2013）年の３月、４月ぐらいです。そのとき、実は奥さんのお腹に２人目の子どもがいて、これはやばいなと思いながら過ごした記憶があります。そんなときに、高校の同期に相談したところ、たまたまふじみ野市役所で生活保護の面接相談員があり、やってみないかということで、働けるのであればと思って臨時職員として就職しました。

そこで生活保護の相談員やったのですけども、面接相談員では、生活に困りました、どうしたらよいかわからない、というような方の相談に乗ることが多かったです。しかし、全く福祉の資格などない職員が、福祉を学んできた私より正確な案内ができる、これはすごいなと思いました。そこで、再度勉強しようと思って、社会福祉士の資格を取ったんですね。また、ふじみ野市で働いている公務員を隣で見ていたときに、初めて公務員もいいなと思いました。ただ、公務員って、皆さんご存じのとおり年齢制限があって、大抵26から８くらいで募集がなくなってしまいます。社会福祉士のほうも大体それくらい。川越市や越谷市といった中核市であっても32から４歳ぐらいで切るのが現状であったため、半ば諦めていました。

一方、生活相談員の仕事も、給与的な面から辞めざるを得なくて、正職員で社会福祉士として働きたいなと思って、良くして頂いている職員さんに相談したところ、ふじみ野市の包括支援センター、今で言う「高齢者あんしん相談センター」に空きがあるというので、平成27（2015）年４月から、そこに勤めることができました。そこでは主にふじみ野市役所の高齢福祉課などと連携を取って高齢者の支援をしたり、包括支援センターの社会福祉士を集めて成年後見支援制度の検討会、ケアマネジャーさんへの講演会、そういったものを行っていました。

そんなときに、本当にこれもご縁なのですけど、勤め始めて２カ月後ぐらいに、今の志木市役所に求人募集が出ました。しかも年齢が35歳までと出た。その時私は33歳、ぎりぎり受けられるということで、だめもとで受けてみようと受験したところ入庁ができたんですね。

それで今、市役所のほうに入庁して勤務をしています。今年、精神保健福祉士も取って、これからいろいろやってこうかなと考えているところです。これからやろうとしていることに、社会福祉士の地位向上があります。これは個人的な所感なのですが、志木市役所に限らず、社会福祉士って何ができるのかと、よく言われるのです。資格がなくても、同じじゃないかって言われることが多いです。ただ、社会福祉士の勉強をしてきた中で、社会福祉士の援助技術やアプローチの

専門性は、非常にあると確信しているところです。しかし、現場で実践している社会福祉士は、自らが行っている専門アプローチに対して、可視化した説明ができていない。だから社会福祉士って何ができるのかとすごく言われる。そういったことを今後、解消するような形で何かできればいいかなって考えています。

湯澤　ありがとうございました。先ほども、「無駄なことは何もなかった」という学生時代を振り返りましたが、卒業後も「無駄なことは何もなかった」というふうに感じました。それでは八重樫さん、よろしくお願いいたします。

八重樫　卒業後は、私は福祉系の職には就いていないので、コミ福の卒業生としては異色なのかも、と感じながら、きょう登壇しています。在学中、３年生のときに、「CSRインターン」とインターネット上で検索をしたところ、たまたま大日本印刷の企画制作会社のDNPメディアクリエイトという企業が、さまざまな有名企業のCSR報告書を企画制作している。DNPグループでインターンシップが開催される。ということを知りまして、面白そうだなと思ってインターンに応募し、その企業に行きました。そこではただ誌面の編集制作やデザインをするだけではなく、企業がいま取り組んでいる活動の中で、どれがCSR活動として世の中に発信すべきなのかといったことを、一緒に棚卸しし構築していくことにも取り組んでいたので、やりがいがありそうな仕事だな、とインターンシップ中に感じていました。ただ、私としてはマスコミ志望であって、報道寄りの職種を目指していたのでこの会社は志望していませんでした。ですが、就職活動をとおしていろいろと価値観が変わっていくなかで、ご縁があって入社しました。

基本的には裏方の仕事ですので、詳しい社名は控えますが、ディレクターとして、有名企業のCSR報告書、会社案内、社内報などの企画制作を担当していました。今日はケース１、２、３として、少しずつご紹介しようと思います。まず、首都圏の音楽大学です。これは結構印象的な仕事でしたが、今、QRコードとか、紙面からWebサイトにリンクして動画コンテンツを見せるとかは当たり前ですが、当時はそこまで一般的ではありませんでした。当時弊社の印刷技術で、QRコードではなくて、絵柄・デザインにスマートフォンをかざすと、Webサイトに飛んでコンテンツを楽しめるというような技術ができたばっかりだったので、それを組み合わせてみよう、と取り組みました。結構コミ福は都心、関東から来ている学生が多いですが、この音大は地方からの進学者がとても多いので、大学案内を繰り返し読んで、キャンパスライフを思い描けるようなコンテンツも見てもらえるといいのかなと考え、提案、受注、制作をしました。こうした制作物って、５～10社のコンペでして、得意先に向けてこういう課題がありますよね、こういうふうに作っていったらどうでしょうというような提案をして、受注後に実制作

を進めていく感じです。この音大の仕事では、発行した後に、大学案内の取り寄せ件数や、志願者数が増えて、結果的に定員増につながり、得意先に感謝される経験をしました。

二つ目は、外資系大型倉庫店の情報誌ですね。好きな方はすごく好きな、あの会員制の倉庫店です。この得意先は広告を打たないという企業で、CMも一切放送してないんですが、これは日本国内会員向けの情報誌です。この創刊から数号を、大日本印刷に転籍するまで担当しました。よくコンビニエンスストアで企業とコラボしたプライベートブランド商品が売られていますよね。この倉庫店にもそうしたPB商品が多く存在するため、そうした商品のヒストリーを取り上げたらどうでしょうという提案を編集企画のなかに盛り込んだところ、その商品が、この号が出た後に売り上げが250倍アップしたという経験をしました。作り手の思いをきちんと届けることが、読み手や買う人の心に響く、ということを感じた経験ですね。ほかには、自社、DNPグループのCSR報告書・環境報告書、ソリューション紹介情報誌なども担当させていただきました。社歴が浅い頃から自社ブランディングに携わった貴重な経験だったと思っています。実は、立教学院の仕事もちょっとだけ担当させていただきました。弊社グループは紙やWebだけではなくて、建屋の企画設計、施工までを担う部署もあります。池袋キャンパスの立教学院展示館は、弊社のそうしたスペースデザイン系の部署が中心となって取り組んだ事業です。そのなかで私は学内に掲示するポスターやチラシ、OB・OGに郵送する告知リーフレットなどの企画制作を担当しました。当時社内で「立教の仕事をやりたい」とよく言っていたので、嬉しかったですね。

その後、2015年の4月に親会社の大日本印刷株式会社に転籍しました。これは、CSR報告書などの制作でいろんな企業に取材させていただくと、「社会的意義のある新規事業に取り組みました」という社員の方にお話を聞かせていただく機会が多くてですね。私もキャリアのなかでそういう仕事に打ち込む時期があってもいいなと思うようになりました。当時、本社部門でアドバンスドビジネス（AB）センターという新規事業部門が人材募集をしていました。これまでDNPは、お客さんから「こういうものを作りたいと思ってるんです」という依頼を受けてそれを作っていくBtoBの業務中心の企業でしたが、生活者に視点を向けて、BtoCに取り組んでいくための新規事業部門ですね。私は職員免許を持っているので何かできないかなと思って、転職のような感じなのですけども、社内公募制度でグループ会社から本社に転籍しました。そのABセンターで、まず1年半ほどICT教育システムの製品企画、広報等を担っていました。いま皆さんも教員の多忙感についてニュースなどで耳にする機会が多いと思います。そこで、日々のテスト・ドリルの採点という業務の効率化と、児童生徒の苦手教科、得意科目の傾向が瞬時に把握できて教員の業務負荷軽減に貢献する、というデジタルテストシステム

です。製品化に向けて様々な取り組みをしましたね。例えば、ICT教育に力を入れている、関西のある小学校では児童が１人１台タブレットPCを持っているのですが、同校で授業中にタブレットPC上で解いたテスト・ドリルの回答データが瞬時に教員のPCに送られて、教員が傾向を見て、どこを重点的に解説しようかを考えて授業を展開していく、という実証実験を行いました。このときは実証実験を行わせていただく学校の開拓や、弊社はシステムしか持っていないので、教材会社へのコンテンツ提供依頼なども担当していました。

そして２年ほど前に、人事異動がありまして、やっと私がコミ福で学んだことにダイレクトにつながる業務かなっていう部署です。弊社内で「地域創生」に取り組んでいこうとテーマが挙がりまして。日本国内では「地方創生」という言葉が一般的ですが、弊社は地方という言葉だと、都市と地方という対比・距離感が生じる。そいう捉え方はどうなのだろう、というようなコンセプトから、「地域」とあえて言っているそうです。その部門から声がかかり異動になりました。以来、窓口業務支援システムの製品企画、広報、営業に従事しています。どんなシステムかと言いますと、私に結婚や出産、死亡とか、そういうライフイベントが生じたときに、どういう手続きがあるかなかなか分かりにくい。それを、質問に答えていくことで私に必要な手続きを特定して、一括で作成できないか。そして、複雑な窓口業務に取り組む窓口職員の業務負荷軽減にもつながるような製品が作れないかというようなことを考え開発しました。この製品の、必要な届出・申請を特定する「手続きナビ」という機能に関して、コミ福の恩師、原田先生と共同研究をさせていただきまして、ある中核市規模の自治体と半年ほどをかけて、各課のベテラン職員の頭の中にある手続きフローを見える化していきました。普段窓口で市民にどういう質問をしてどういう申請者にどういう手続きをご案内し、「この様式を書いてください」と説明しているかといったことを、政省令に紐づく様式が特定されるナビゲーションになるよう整理していきました。昨年（2017年）の12月から販売開始し、千葉県船橋市などで導入いただいています。船橋市は住民異動の窓口を『書かない窓口』と命名し、市民に書かせない。直接窓口に来ていただいて、職員がヒアリングをしながら届出・申請を特定、作成できますよという形で、現在お使いいただいています。船橋市さんは、住民異動の窓口では正規の職員ではなく、嘱託の職員さんが窓口業務を担当していて、業務スキルにばらつきがあることで、市民の方に「私、こういう手続きが必要なんです、多分」といった質問をされたときに、回答に時間を要する。嘱託職員への指導もあり、正規職員の残業時間が減らない。というような課題を

船橋市役所　住民異動窓口にて

解決したいという思いがありました。導入していただいてから、そうした他課に確認を仰いで市民を待たせるであるとか、案内ミス・漏れが少なくなった、減ったと伺っています。

今、他の自治体さんでも、実証実験であったり導入準備を進めているところです。あとは、ちょっと話は変わるんですけども、この夏、国家資格のキャリアコンサルタントの資格を取得しました。これ、なぜというと、私、若手社員の指導員を務めたり、弊社の女性活躍支援制度などをとおして幅広い世代の女性の相談に乗ることが多かったんですね。一方で相談に乗るばっかりで、寄り添って、その人が今後どういうキャリアを進んでいくかみたいなことを一緒に考えていくような回答ができてないなとか、そもそも私自身のキャリアを見直す機会を持ちたいなとか、「働き方改革」ってよく聞くけれど、一向に現場は何も変わってないみたいな思いがあったので、体系的に学ぼうと決心しました。平日働きながら土日学校に行くっていう生活は、すごく大変だったんですけど、半年ぐらいかけて何とか合格しました。今後はこういう資格も活用した仕事をしていけたらいいなと思っています。最後のスライドなんですけども、コミ福で培った基礎力である、「見る・聴く」、「考える」、そして、卒業後にスキルとして身に付けていくものだと思うんですけど、「つくる」、「提言する」っていうような力がどんどん身に付いていって、今はこの四つサイクルで日々の業務に励んでいるかなと思っています。

湯澤　ありがとうございました。皆さん、卒業後もいろいろな資格を取得したり、活躍の場を広げていらっしゃるということがよく分かりました。それでは最後に、長谷さん、よろしくお願いします。

長谷　ブータンの経験を経て、やはりスポーツには、国家間の利害とか国境とかを超えた、同じ人間としての、お互いをリスペクトし合えるような、すごく大きな力があるなっていうのを実感しました。ちょっと堅苦しいことを言ってしまっているのですが、今、私が物事を考えたりとか仕事をする上で、ブータンの経験を経て私のエンジンとなっているような考え方の部分についてお話させていただければなと思います。

ブータンの経験について、小学生とか中学生向けにお話をさせていただくことがあるのですが、今日はその内容を紹介をさせて頂きます。

皆さんにとっての「幸福の方程式ってなんですか」というお話を、ブータンのお話と併せてするんですね。もちろん、幸福は一様じゃないと思いますし、皆さんそれぞれに考え方があると思います。例えば中学生に聞くと、僕は24時間分の睡眠時間ですっていう子がいたりとか、いろんな方程式があると思うんです。ま

た、井上信一さんという人は、現在の資本主義社会の中で、「幸福とは欲望分の財」という方程式を描かれています。これはどういうことかと申しますと資本主義社会の中では、例えば100万円の車が欲しいと思っていて、そこに1,000万円の財を持っていたら幸福度数は10ということになります。欲望を大きくするにつれて財も大きくしなければ幸せって成り立たないよねっていうのが資本主義社会的な考えということになります。現代社会では多種多様な広告によって、欲望はどんどん大きくなります。要するに欲望が大きくなったら財も大きくしないと幸せ度数は大きくならないよねっていう考えがこれにあたります。これをブータン人の考え方に置き換えると、ちょっと強引ではあるのですが、ブータン人って、やはりすごく財は小さいんですよ。GDPもすごく低いですし、車も買えるようなお金もありません。でも財がすごく小さいので、例えば100万円の車が欲しくて10万円しかないから、幸せ度数って0.1なのかというとそうではなくて、欲望をさらに小さくすることで幸せになろうという考え方が成り立っているのだと思います。100万円の車は欲しいけど、10万円の自転車でも何とかなるかなというような、そんな感じなのかなと。この「足るを知る」というか、現状に満足するというのがブータン人の幸せの秘訣なのだとブータンの経験を経て思いました。

ブータンの公用語のゾンカ語で幸せとは「セム・ガエ」というのですが、セムは心を意味します。そして、ガエは居心地のいい状態という意味を持ちます。それぞれ単語の組み合わせで幸せという言葉が成り立っていて、つまり、ブータン人の幸せって「心の平穏」なのですね。だから、私はスポーツを通じて、セム・ガエを実現できる社会をつくりたい、そういったところを今は目指しています。

最後に「スポーツマン」という言葉について紹介させて下さい。大学時代、恩師に「スポーツマンシップって何だ？」って聞かれたことがあったのですが、答えられませんでした。例えば体育祭とか各スポーツイベントで「宣誓、僕たち私たちはスポーツマンシップにのっとり」っていう宣誓をすると思いますが、「スポーツマンシップ」って何かって言われたときに、答えられる人ってなかなかいないと思います。「スポーツマンシップ」を日本の国語辞典で引くと、スポーツができる人とか、スポーツが好きな人とか、運動に秀でている人って書かれているのですけど、実はイギリスのオックスフォード大辞典で引くと、スポーツマンって「グッドフェロー」って書かれています。グッドフェローとは「よき仲間」という意味で、スポーツマンとは仲間がいてはじめて成り立つ言葉なんです。つまり、スポーツマンとはスポーツができる人でもスポーツが好きな人でもなく、そのコミュニティを形成する仲間、チームを形成する仲間というのがスポーツマンの言葉の原点のようです。ですから、私はブータンの経験を経て、ブータン人からコミュニティを形成する１人の人間として受け入れられて、スポーツマンとして受け入れられたということがブータンの生活における最大の幸せだったなと

思っています。現在は仕事の傍らスポーツマンシップの啓蒙活動や教育活動にも従事しています。

湯澤　ありがとうございました。４人の方のご発表はここまでということになります。土屋さん、皆さんの話を聞いて、１期生としてどうでしたか。時代の変遷の中でICTの発展のことなどいろいろな話題が出てきましたけれども、何か感想がありますか？

土屋　私の学生時代から変な人多いなと思ってたんですけれども、やっぱり、脈々とその文化が受け継がれていて、やっぱり立教のコミ福の面白さっていうのはこの多様性にあるなというふうに、お話を聞いていてすごく思いました。

湯澤　「変」っていうのは「ユニーク」「独自」ということであって、とても大事なことですよね。ありがとうございました。砂井さん、感想どうです？

砂井　確かに、立教卒業ですって言うと、職場でも「ああ」って言われるんですね。どういう意味ですかって言うと、ユニークな人が多いよねっていう。

湯澤　なんですか。

砂井　ユニークな人。良くも悪くも・・・。

湯澤　土屋さんのおっしゃっていることと同じですよね。

砂井　やっぱり、土屋さんたちの時代はコミュニティ福祉学科しかなかったので、コミ福生としてやってきたんですけど、その後に政策学科とか出てくると、こんなにも考え方とかプレゼンが変わるのかっていうのを感じましたし、聞いててすごく面白いなって思いました。多分、皆さんがコミ福生だけだと、話す内容も同じような感じになると思うのですけど、ビジネスとか政策学科というと、学生の感じ方も違ってるんじゃないかなと、今日話を聞いてて思いました。

湯澤　八重樫さんはどうでしたか。

八重樫　そうですね、私もまったく同じことを思っていたのですけど。やっぱり立教生っていうとなんか「ちょっと変わってるよね」とか言われることは多いですね。

結構、文化的な有名な人が卒業生に多いっていう、世の中的な印象があると思うのですけども。あるこだわりを持って物事に取り組んでいるみたいなイメージを持たれることが多いのかなと思っています。あと、登壇している全員に共通しているのは、前に出ていくっていうよりは、寄り添って聞いていく、私ができることは何だろうみたいに考えていくことで、根底にあるのは一緒なのかなと思いますね。

湯澤　私も皆さんの話を聞いて、学生時代に「こだわり」というものをつかんでいる、と感じました。その「こだわり」が鍵になって、卒業後に、ぐぐっ！と突き進むエネルギーになっているというのが、皆さんに共通していることだと思いました。長谷さんどうでしたか。

長谷　私は、「元ギャル男」なんで、偉そうなことは言えません。

湯澤　今は違うの？

長谷　私は、大学時代、４年間ずっと金髪ロン毛だったので、新座キャンパスではサイヤ人って呼ばれてたんですよ。そんな私も受け入れてくれるような、多様性を認めてくれる、すごく素敵な環境だなと思います。そして、そんな私と「一緒にホノルルマラソン走りに行こうぜ」って誘ってくれる先生とか、会場にいらっしゃる濁川先生のように「キャンプ一緒に行こうよ」って誘ってくださる先生がいたり、そういう多様な生き方を許容してくれる空間はすごくありがたいことだと思います。

湯澤　この大学という空間がそもそもそういう場でなければ、コミュニティ福祉って実現できないですね。ありがとうございます。ではここから、フロアの方から質問や意見、感想などをやり取りをさせていただきたいと思います。まずは、口火を切るのは濁川先生でしょうか。

濁川　すてきなご報告、本当にありがとうございました。皆さんが、卒業後、本当に素晴らしい、１人ひとり多様な、１人ひとりが輝いて素敵な活動をやってるのを聞いて、今日は嬉しく思いました。20年ですね。20年前にコミ福にいたのは、別に自慢するわけですけど、三本松先生、湯澤先生、沼澤先生と私だけですかね。

湯澤　化石組ですね。

濁川　ええ、化石組で。もう私も、あと１年で卒業なんですけど。20年間やってきたことって間違ってなかったということですね、私たちが。それをつくづく今日は感じさせてもらったので、とても嬉しいです。

湯澤　先生、今、顔が輝いていますね。

濁川　はい。そういうことで、非常にいい時間を頂きました。単なるサイヤ人だった長谷と湖で勝負しようと言ったら、彼が風邪ひいて寝込んで、結局勝負はお預けで私の１勝０敗になっていますので、またそのうちキャンプに行って勝負しましょう。今日はありがとうございました。以上です。

湯澤　ありがとうございます。学生時代には「皆さんは学生さんで、私たちは教員」という間柄なのですが、卒業後は「同じ社会で生き、一緒に社会を創っていく同志」という間柄になっていく、という感じですね。そういう意味で、教員の仕事というのは、とても贅沢なありがたい仕事です。大学教育を通して、たくさんの仲間、同志が増えていくということを、本日もあらためて感じました。藤井先生はいかがでしたでしょうか。

藤井　どうもありがとうございました。私は、ちょうど八重樫さんが政策学科の１期生で私も教員としては、ちょうど政策学科ができたときに入ったので、お互い１年生っていう感じだったんです。その頃はまだ30代だったんですね。今は50代になって学生との関係性っていうのは、親ですみたいな感じがするんですけど。あの当時は多分、あまり教員って意識はなかったんですよね、友達みたいな感じだったので。（ゼミは）すごいメンバーだったね。大体、夜にやってるともう、一度に３人ぐらいが同時に話し出す感じでね。１期生ってすごいパワーがあったので、本当に強烈に覚えています。

そこで、一つ聞きたいのは、それぞれ皆さん、相当コミ福の中でも頑張ってリーダーシップを執ってこられた方かなと思ってます。八重樫さんも本当に、この人はいつ眠るんだぐらいの感じで、私たちはよくマグロって言っていたんです。止まると死んじゃうんじゃないかってぐらい、いつも動いているような人だったんで、だからすごいエネルギッシュだったんですけど。ただ、一方で、今日はあまり出してないけど、結構辛口のところもある

んですよ。政策学科、卒業式のときに学生がアンケート調査をやって、政策学科のここ直したほうがいいんじゃないかって言ってきたんですね。

湯澤　学生がアンケート調査をやって改善点を書いたということですか？。

藤井　はい。学生のなかで不満とかいろいろあったと思うんです。多分、コミ福力という意味では、われわれの教育自体もまだと思ってるところも結構ありますが、かなりこの10年間ぐらいで、例えばインターンシップはかなり構築できてきたかなと思います。が、今後どうしたらいいのか、外部にいる卒業生から一体どうしたらもっとこの学部が良くなっていくかを、いろいろアドバイスいただけたら。

湯澤　それは真摯に受け止めたいと思いますね。まず八重樫さん。どうしたらいいでしょうか。

八重樫　貴重なご意見、ありがとうございます。私、辛口って言われたので辛口なこと言うと、在学中に放送研究会で池袋キャンパスの学生に言われて一番悔しかったのが、「コミ福生っておじいちゃんおばあちゃんの介護について学んでるんでしょ」って言われたんですね。全然違うよと。でも、そのときに反論し切れなかったんですよ。それは、学部としての広報力というか、学生はこういう学問を学んでいて、これは社会の今、もしかしたら世の中に最も必要とされている学問かもしれない、みたいなところをもう少し強く発信していかれると、よりブランド力が上がっていくのかなと思います。最近の『週刊ダイヤモンド』で大学の系統別格付けランキングがあったと思うのですけど、社会学部系で立教はトップファイブぐらいにいましたけど、社会学部、観光学部、コミ福という順番でした。もっと強みを発信してほしいなと思っています。

湯澤　ちゃんとリサーチしているのですね。

卒業生のリサーチ力というのもありますが、今度ぜひ、改善点の提案をお願いしたいとひそかに思いました。ありがとうございます。学生さんの皆さんから卒業生の方に何かあればお願いします。

在学生　コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科の学生です。本日は貴重な話をありがとうございました。先ほどの藤井先生の質問と絡めてなんですけれども、私たちが現役の学生としてコミ福に在籍していて、

将来皆さんみたいに力強くコミ福力を生かして働くためには、今、現役生はどんな学びをしたらいいのかということを、何かあればお答えいただきたいです。

湯澤　今どのような学びをしたらよいか。砂井さん、どうですか。

砂井　今振り返って学生のとき何を勉強すればよかったのかなというのは、疑問に思う力って、特に持っていたほうがいいと思います。これは当たり前のようではあるのですが、これは本当に正しいのかっていう視点は常に必要だと思います。例えば、出産のときの分娩台ってあって女性が横になる。でも実際あれって、本当に母子にとっていいのかというと、必ずしもそうではないといわれています。実際は立ってするのが一番良いと言われている。引力は下に引っ張られて、赤ちゃんが下に出るから、下で支えたほうが良い。ではなぜ横になるのかというと、これは諸説ありますが、ルイ14世が出産のシーンを見たいと言って、分娩台ができたといわれてる説もあるんですね。世の中に当たり前にあることなのだけど、それって実はおかしいんじゃないかということもたくさんある。そういうことに気付いて、なぜなんだろうって学ぶと、新しい視点とか、実はこれ、こうなんじゃないのかというような視点が生まれるんじゃないかなと思います。与えられたものに関して、常にそれは本当なのだろうかと検証してみる。そして、実は違うんじゃないかなという、ちょっとした芽生えを大切にする。そういったものが今後、生活、仕事をしていく上で大切になってくるんじゃないかなと思いますし、今も痛感してます。

湯澤　ありがとうございます。即興でこの答えが出てきますね。やはりこれは長谷さんに聞かないと。どうですか。

長谷　やっぱり一つは、海外に行くことだと思ってます。海外から日本がどう見られてるかっていう視点はすごく大切だと思いますし、国を出ないと、日本人がどれくらい世界から愛されているかとか、日本がどれだけ豊かな国かということに気付けないと思います。どうしても日本の中だけで生活していると井の中の蛙になっちゃいますよね。 新しい社会を作っていくとか、人の幸せを考えることができる人っていうのは、その多様性を許容できるだけの器の大きさや経験がないと、それってなかなか形成されないと思います。

　学生時代に海外へ出る経験というのはすごく大切なんだなっていうのが一つと、もう一

つは、“WHY”で考えることと思います。社会人としていろいろな仕事に携わる中で強く感じることなのですが、多くの人はどう儲けるかなど、“HOW TO”で考えてばかりだなと思います。でもそれって、何のためにやんなきゃいけないの？って思うことが多いです。砂井さんのお話につながるんですけど、人の幸せに繋がらないことってあまりやる必要ないことなのかもしれません。“HOW TO”じゃなくて、“WHY”で考えられる視点を大学時代に培うっていうのもすごく大切なのかなって感じます。海外を知ることと、“WHY”を考える訓練はすごく大切なのかなと思います。

湯澤　まだまだ話し続けたい感じですね。では、最後に「コミ福力って何？」ということや、学生の皆さんへのメッセージを考えてきてくださっていますので、よろしくお願いいたします。土屋さんからどうぞ。

土屋　コミ福力とはということで、私、先生に言われて思ったのですが、ずっとコミュニティっていうことを考えてきたんだなって、三本松先生にご指導いただいてきたときからずっと考えてきたんだなと思いました。コミ福力というのは、まさにコミ福のコミュニティ力だと思います。先ほどお話がありましたけれども、本当にバックボーンがさまざまな先生方やユニークな学生の方々がたくさんいました。そういった多様性の中でいろいろなつながりを持って、私も実際就職した後もそのつながりに助けられて、今、働いているなと思っています。それがこのつながり力、これがコミ福のコミュニティ力だなと思っています。

先ほどの、福祉って介護とかお年寄りのお世話するところでしょっていう話ともつながるのですけれども、コミ福っていう名前がすごく粋でいいなって私は思ってるのですね。社会福祉学部じゃなくてコミュニティ福祉学部ってしたセンスに万歳なのですけれども、この制度政策の枠に収め切れないような人間の生活を支えよう、作っていこう、そういったところにコミ福という名前が表れてるんじゃないかなと思っています。

湯澤　ありがとうございます。日本社会は、どちらかというと人間が制度・政策に合わせて生きていかなければならないような社会ですけれども、本当はその逆ですよね。人間に合わせて、あるいは人間に応じて制度・政策を創っていくという観点が必要なのだと思います。では、砂井さん、お願いします。

砂井　実践力だと思っています。立教の学生は、さっきもお話ししましたけど、考えることより動く人が非常に多いのかなというふうなイメージを持ってます。

湯澤　遺伝子なのですよね。

砂井　はい。私が中越地震ボランティア行こうとしたときも、地震があって揺れて、友人に電話して、「ボランティア行く？」、「行こっか」っていうふうに決めたのが最初だったんですね。そこに、移動手段とか荷物とか、私のはどうするかっていうのをまず考えても、取りあえず行こうって決定して、あとで肉付けをしていく、そのように動いていったというようなイメージがあります。私の兄も父も立教なのですけども、基本的にロジカルに考えることがあるのですが、それでもまず行動するんです。

そういう立教のコミ福力って何なんだろうって考えたときに、そういう実践力があるんじゃないかなというふうに考えています。これは私の個人的な所感ですが、もし皆さんが、これやろうかな、どうしようかなって迷われてることがあるんだったら、失敗するかもしれないけれど、まずやってみるっていうのがいいのかなと思うのです。圧倒的に、やらなかったことに対する後悔ってすごい多いんですけど、やったことに対する後悔ってほとんどないです。やって失敗したっていう結果があるから、あまり後悔することがない。だから、もし迷われてどうしようかなっていうのがあれば、まず実践して経験してみる。そういったことも大切なんじゃないかなとは感じます。以上です。

湯澤　ありがとうございます。それでは八重樫さん、お願いします。

八重樫　他の学部の学生から、皆さん、「コミ福生って優しすぎるよね」とか言われたことないですかね。ぶつからずにまず聞いて、ちょっと控えめながら私の意見を言っていくみたいなことをやられている学生さんが多いんじゃないかなと思うんですが、それってすごく強いと思うんですね。私はコミ福力を「傾聴力」と、あわせて対になる形で「つなぐ力」って考えたのですけど、社会人になると、本当に言いたい放題言う人って山ほどいるんです。多様な価値観があってぶつかる。チームで仕事をしていると必ずぶつかるなっていうのは日々感じます。私は今、プロジェクトマネジャーという立ち位置にいるのですが、チームメンバーはそれぞれやりたいこととか思っていることが違うので、「この人は何を思ってこう言っているんだろう」という視点で聴いて、それぞれの折衷案を提示して落ち着いていく、落としどころに着地するみたいなところを繰り返

しています。そういうような傾聴力と、それぞれの強み弱みを引き出してつなげるところは、きっとコミ福生は強いんだろうなと思います。
湯澤　ありがとうございます。さて、長谷さん最後に、締めをお願いします。

長谷　私はコミ福力を、人を大切に思う想像力と創造力って考えました。そもそも福祉って、私の中での定義は、「人を大切に思う営み」のことかなと思ってまして、それについて思うこともすごく大切なことなのですが、それをどう創ってみるか、実践するかが大切だと思っております。そういった、福祉、すなわち、人を大切に思う営みというものを社会全体で実現するために考えて、それをどうしたら体現できるかっていうところを実践していく、それがコミ福力なのかなと私は思います。

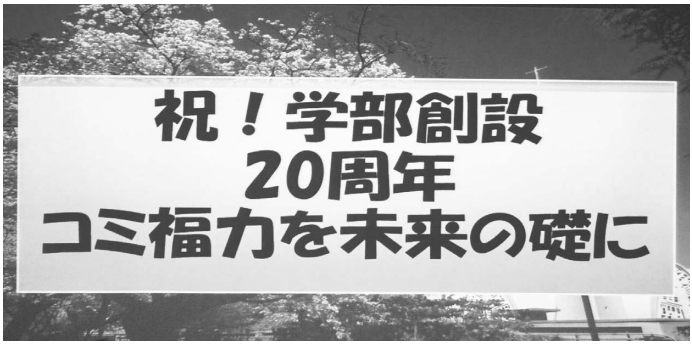
湯澤　ありがとうございました。あと残り時間が５分というところまで迫ってきました。実は、まなびあいの会員の方から、『あなたにとってコミ福力とは』という質問への回答を事前に寄せていただきましたので、最後にご紹介させてください。福祉がもっと幅広く多様に発展するという視点から、『多様な福祉の発展』、と寄せてくれた方がいました。あるいは、『今後の日本社会を生きる上で根幹となる力だ』という力強いのもあったり、『人の背景、バックグラウンドを想像するしなやかさ』と書いてくださった方もいらっしゃいます。また、「コミ福」という言葉から、「コ」は「行動力」、「ミ」は「道行く力」、「フ」は「振り返る力」、「ク」は「苦しくても歩む力」と書いてくださった方もいらっしゃいます。

これからも、このまなびあい学会を基礎とし、このように皆さんと卒業後にもつながり続けるということが「コミ福力」の土台になっていくと思います。私たち教員も学生の皆さん・卒業生の皆さんの声に応答し続けながら、学部を発展させていかなければならないと、本日あらためて思いました。かつて、『コミュニティ福祉学入門』という本を教員でまとめたことがありました。この本の中では、「コミュニティ福祉学の思想」という章を設けています。やはり、ノウハウではなく、根底にある思想というものから討論して、福祉社会を創造していくミッションを皆さんと共に実現していきたいと思います。

実は、全国の大学に「コミュニティ福祉」は増殖中です。いろいろな大学等で、「コミュニティ福祉学科」「福祉コミュニティ学科」などの名称が使われるようになってきているのです。そのような点からすると、立教大学が「元祖・コミ福」です。本日を起点に、20周年を超える歴史を在学生・卒業生・教員ともども創っていきましょう。

最後に、まなびあい学会の副委員長、卒業生の大川さんにご挨拶いただきたいと思います。

大川　コミ福卒業生３期生の大川といいます。卒業してからも、コミ福愛が強すぎまして、このまなびあいにも毎年参加させていただいています。今日、４人の話を聞いて、きらきらしている活動から、私の十数年を振り返りつつも、コミ福の一員であることに誇りに思ったりもしています。きっとこれから卒業する皆さんもたくさんいて、コミ福力が広がっていくことにもわくわくするなと思いますし、コミ福にまた皆さんが戻ってきて、学びを深めたり共有したりする場所があるっていうところにも、またまなびあいが活用できたらいいなと思って、ほそぼそと関わっていけたらいいなというふうに思っています。４人の方、ありがとうございました。お疲れさまでした。

湯澤　大川さん、どうもありがとうございます。これで本日のシンポジウムを閉会とさせていただきたいと思います。シンポジストの皆さま、本当にありがとうございます。また今後もよろしくお願いいたします。そして、ご参加くださった学生の皆さん、卒業生の皆さんも本当にありがとうございました。

（了）